

乙部 由子 著

『不妊治療とキャリア継続』

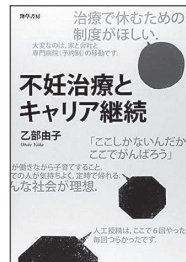
杉浦 浩美

(埼玉学園大学大学院専任講師)

女性の就業継続については、長らく「育児と仕事の両立」が大きな課題とされてきた。さらに近年は、妊娠という身体的制約を負いながらの就労、すなわち「妊娠と仕事の両立」についても社会的な関心もたれるようになった。来年度から実施されるマタニティ・ハラスメント防止措置の義務化とは、「妊娠と仕事の両立」が果たせるよう職場環境を整える、そのような意味合いも含まれなければならないと考える。

だが「産む性である」という女性の身体性が直面する就労との葛藤は、妊娠・出産ばかりではない。不妊治療という妊娠に至る過程もまた、女性の身体が経験する葛藤だ。たとえ不妊の原因が男性側にあったとしても、治療としてより直接的な施術をうけるのは女性の方であり、それは身体的にも精神的にも大きな苦痛を伴う。仕事をしていれば、治療と仕事の両立をどのように図るのか、難しい課題にも立ち向かわなければならない。

著者は、まだ社会的関心も理解も薄いと思われるこの「不妊治療と仕事の両立」という新しいテーマに挑んでいる。生まれてくる子どもの24人に1人が不妊治療による、という現実のなかで、本書で紹介されているあるNPO法人の調査によれば、不妊治療で休職か退職をする女性は4割程度とのことだ。著者はあえて、治療中も就業を継続した女性たちに着目することで、何が「両立」を可能とするのかを明らかにしようとする。インタビュー調査の対象となった25人の女性たちは、妊娠・出産をした人（すなわち、不妊治療のゴールにたどりついた人）ばかりではない。インタビュー時点で治療中が13人（うち、1人目を出産後に2人目を治療中が3人）おり、彼女たちは、未だゴールの見えない「両立」



●勁草書房
2015年11月刊
A5判・164頁
本体2700円+税

●おとべ・ゆうこ 名古屋工業大学男女
共同参画推進センター特任専門員。

を模索している。そうしたリアルな語りから、仕事を続けながらの不妊治療が、身体的に、精神的に、経済的に、さらに時間的に、どのように可能か、あるいは困難か、考察される。

本書の構成は以下の通りである。第1章では、不妊治療の歴史や定義、統計からみる現状等が示される。第2章では、不妊治療に至る背景を、医療的視点と社会的視点から検討している。第3章では、インタビュー調査の全体像が示される。調査対象者の特徴として、「治療費は、女性名義の口座、女性自身の給与からの支払いが半数以上」といった興味深い指摘もなされる。第4章では、夫との関係を「不妊治療への協力」という観点から考察している。不妊の原因が妻側にあるのか、夫側にあるのかで、夫婦の協力関係も変わってくる。

つづく、第5章、第6章、第7章が、本書のメインテーマ「治療と仕事の両立」に直接的に関わる部分である。まず、第5章では、25人中20人が、不妊治療を上司に報告していた、というデータが示され、「治療報告」が最も重要であることが指摘される。不妊治療は、頻繁な通院と待ち時間も含めた長時間の拘束が必要となる。介護や育児のような休暇制度がないなかでは、「休暇（時間）」の確保が最も重要となるが、それは、現在のところ「上司の理解」によるところが大きいようだ。第6章では、女性たちが日常生活で実践する「両立戦略」が紹介される。職場からの距離が近い病院を選択したり、夜遅く（あるいは朝早く）から対応してくれる病院に通院した

りと、治療に必要な「時間の捻出」は、女性の側からも様々に努力されている。第7章では、「両立」の葛藤が垣間見られる。経済的に「働かなければ治療できない」「仕事は今までと同じようには出来ないと割り切って働きました」というように、強い意志で就業継続に臨む女性たちがいる一方で、「辞めるしかないのか」と悩む女性や、「後ろめたい」という思いを抱えて、周囲のまなざしに過剰に反応する女性たちもいる。それぞれの「両立」が複雑なせめぎあいのなかで果たされていることがわかる。第8章では、正規・非正規の雇用形態の違いが検討されている。治療のしやすさに大きく影響を及ぼすわけではない、と結論づけられているが、これは「時間の捻出」に着目した分析であり、もう少し、多角的な検討が必要ではないだろうか。

巻末には、「調査対象者事例 一覧」が収録されているが、これが、非常に興味深かった。ひとり一人の経験がボリュームをもった「語り」として収録されているのだが、「採卵前後でも午前様」というハードワークをこなす女性が「治療で評価が下がるのが嫌でした」と語っていたり、あるいは、治療のために正社員になるチャンスを見送り契約社員にとどまるという選択をする女性など、「治療とキャリア」を考えるための貴重な経験が、たくさん詰まっている。本書の分析の視点が「両立可能条件」という、かなり絞り込まれたものになってしまったために、せっかくの豊かなインタビューデータから取りこぼされてしまった要素もあるのではないか。その点が少し残念であった。